

大学生からみた無気力にみえる 他者の行動特性の把握¹⁾

長内優樹***・今野 順***

Behavioral Characteristics of “Seemingly Lethargic Others” Seen from University Students

Yuki OSANAI*** and Jun KONNO***

The study has aimed to clarify behavioral characteristics of others who are recognized to be lethargic from university students. Based on collected data of behaviors recognized to be lethargic in a preliminary survey ($N=293$), the result was categorized by conducting a factor analysis in the main survey ($N=76$). As a result, behavioral characteristics of others recognized as lethargic for university students have been understood to be roughly categorized into “complaint-oriented” and “evasive”.

key words: lethargy, behavioral patterns, university students

問題と目的

無気力に関する心理学的な研究の潮流はスチューデント・アパシー (Walters, 1961) の研究と学習性無力感 (Seligman & Maier, 1967) の研究から発展したものに大別されるが、前者は日本において独自の発展を遂げ、実証的な研究としては大学生を中心に小・中・高各学校段階を対象におこなわれてきた。その研究の多くに共通する目的は、無気力を呈する個人に対する教育的・臨床的対処法を探ることにあると考えられるが、研究者間で無気力的であると判断される行動に一貫性がみられないことが指摘されている (下坂, 2001)。こうした問題は学生の無気力的な行動を評定する際に、教員・研究者の立場から学生にとってほしい行動への期待が混入し、その期待に個人差がみられるためであると考えられる。たとえば、中学校および高等学校の教員からみた無気力的行動を整理した東京都立教育研究所 (1987) は、授業中ぼんやりしている、嫌なことは避けて行動し、直面しようとしめない、などといった特徴をあげており、大学生を対象とした鉄島 (1993) は必修科目などの重

要な授業にもつい出る気がしなくなって欠席してしまうことがある、勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう、などといった特徴をあげている。しかし、評定者の教員という立場からの期待に沿わない行動をとる被評定者 (学生) のみを無気力的と評定することは、教育的・臨床的対処を必要とする無気力状態にある者の全体像の一部しか把握していない可能性がある。そのため、より多面的で客観的基準から教育的・臨床的対処を必要とする学生のスクリーニングを行えるようになることが望まれる。また、動機の推論とよばれる他者の行動からその背後にある動機を推論する過程とその構造について研究する立場 (例えば、伊藤・池上, 2006) からみても、われわれがどのような行動的特徴を無気力的であると評定しているのかに関する知見を蓄積することには意義があるだろう。そこで本研究では、各学校段階のなかでもとりわけ無気力を示す学生への対処が困難である大学生を対象に大学生からみた無気力的であると認識されている他者の行動特性を明らかにすることを目的とする。

予備調査

大学生からみてどのような他者の行動が無気力的であると認識されているのか探索的に把握することを目的とする。

方 法

調査対象者 関東圏内の四つの私立大学の大学生 403 名 (男性 206 名・女性 197 名)。平均年齢は 20.677 歳 ($SD=1.659$)。

調査時期 2008 年 12 月～2009 年 1 月。

調査方法 複数の自己記入形式の尺度から構成した調査票を用いた調査を講義時間内の集合形式で実施した。本研究で分析対象としたのは、上記調査票内で「あなたはどのような行動や言動をとる人を無気力な人だと思いますか? 以下に思いっただけ自由にお書きください。」という指示によって得た自由記述回答である。

結 果

得られた回答のうち本研究で焦点を当てる設問に対して未回答や明らかに不適切と考えられる 110 名の回答を除外し、293 名の自由記述回答を分析対象とした。複数の行動に言及してある回答については、一つの回答が単一の行動を示す独立した項目となるように分類を行った。その結果、590 の項目となった。つづいて、590 項目のうち同一の項目や類似した項目と考えられる項目をグループ化する作業を 2 名の分析者で別々に行った。その結果を照らしあわせ、最終的に類似した項目から構成されると考えられる項目群は 14 グループに収束した。また、その 14 グループについてグループを適切に代表すると考えられる名称を付与した。

¹⁾ 本研究は日本社会心理学会第 53 回大会における発表 (大会発表論文集 p. 368) に再分析を施したものである。

* 駿河台大学心理学部

Faculty of psychology, Surugadai University, 698 Asu, Hannou-shi, Saitama 357-8555, Japan

** 法政大学現代福祉学部

Faculty of Social Policy & Administration, Hosei University

*** 横浜国立大学都市社会文化研究科

Graduate School of Urban Social and Cultural Studies, Yokohama City University

Table 1 大学生からみた無気力にみえる行動の因子分析

	F1: 不平不満	F2: 回避的
人と交流をもととししない	0.905	-0.148
目がうつろ	0.858	-0.149
家にこもりがち	0.675	0.104
ため息が多い	0.644	0.128
目的意識が感じられない	0.537	0.182
「なんでもいい、どうでもいい」という発言が多い	0.123	0.782
「面倒くさい」という発言が多い	-0.340	0.772
「だるい」という発言が多い	0.194	0.694
自主的に行動できない	0.069	0.562
ぼろっとしていることが多い	0.149	0.511
とるべき行動を認識しつつも、行動に移していないようにみえる	0.160	0.449
因子間相関	0.614	

本調査

予備調査において収集・分類された14グループの名称を質問項目とした調査を実施し、大学生からみて無気力であると評定される他者の行動特性を類型化することを目的とする。

方法

調査対象者 関東圏内の私立大学の大学生78名(男性26名・女性52名)。平均年齢は18.705歳(SD=1.106)。

調査時期 2012年7月。

調査方法 複数の自己記入形式の尺度から構成した調査票の一部として、予備調査の結果から14グループの名称を項目とし、「以下の各項目は「無気力にみえる人物の特徴」をあらわしたものです。各項目があなたの考える無気力にみえる人物の特徴にどの程度あてはまるか○をつけてお答えください。」という教示のもと「全くあてはまらない」から「かなりあてはまる」の5件法とするリッカート法を用い、講義時間内の集合形式で実施した。

結果

調査対象者のうち本報告の分析対象である14項目への回答に記入漏れのない計76名(男性26名・女性50名)を分析対象者とした。各項目の平均値と標準偏差をもとめ天井効果・床効果のある項目がないか確認した結果、「学校に来ない」という項目に床効果がみられた。そのため当該項目を除いた13項目について因子構造を明らかにするために主因子法プロマックス回転による因子分析をおこなった。因子負荷量が二つの因子にまたがって.40以上を示さない計11項目(2因子構造)が抽出された(Table 1)。

第1因子は人と交流をもととししない、などの計5項目

から構成されているため「回避的」因子と名づけた。第2因子は「なんでもいい、どうでもいい」という発言が多い、などの計6項目から構成されているため「不平不満」因子と名づけた。内的整合性を確認するため全11項目での α 係数をもとめた結果、十分な値がえられた($\alpha=.882$)。また、因子ごとの α 係数は第1因子は.853、第2因子は.826であり、因子間には正の中程度の相関がみられた(Table 1)。

考察

本研究の結果から「不平不満」、「回避的」に大別される大学生にとって無気力的であると認識される他者の行動特性が把握された。従来の研究者・教員の立場から無気力であると判断される学生の行動と比較すると、鉄島(1993)が指摘したような大学における学業的活動を具体的に示す項目はみられなかった。ただし、東京都立教育研究所(1987)は「覇気がない」という特徴を中学校、高等学校の教員からみた学生の無気力像としてあげており、これは本研究における不平不満因子の目がうつろ、ため息が多い、に通じる特徴であるともいえる。このことは評定者と被評定者の関係性に依存した無気力像と両者の関係性に依存しない一般的な無気力像があることを示唆している。

本研究の限界として、予備調査、本調査ともに教示に解釈の幅があり評定者と被評定者の属性が明確ではないことがあげられる。つまり、本研究で把握された行動は「大学生である自分」という特定の立場を意識したものでは必ずしもなく、自分自身の考える一般的な無気力に関する行動や自分の行動と比較して無気力であると評定される他者の行動であることが考えられる。そのため、今後の課題としては大学生の立場から大学生を対象とした評定による行動特性を把握できるよう教示を明瞭化し、学業に限定されない(研究者・教員の立場からの期待のみに依存しない)大学生にとって積極的に行動すべき活動領域を把握することによって教育的・臨床的対処を必要とする無気力状態を明らかにする必要があるだろう。

引用文献

- 伊藤公一郎・池上和子 2006 動機と行動の関連性についての素朴理論 心理学研究, 77(5), 415-423.
- Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. 1967 Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, 74, 1-9.
- 下坂 剛 2001 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, 49, 305-313.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, 41, 200-208.
- 東京都立教育研究所 1987 思春期における無気力状態の解明に関する研究 東京都立教育研究所相談部.
- Walters, P. A. Jr. 1961 Student Apathy. In Blaine, G. B. Jr. & McArthur, C. C. (Eds.), *Emotional Problem of the Student*. Appleton-Century-Crofts, pp. 153-171.

(受稿: 2013.3.19; 受理: 2013.7.11)